

平成24年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成24年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ウルメイワシ

学名 *Etrumeus teres*

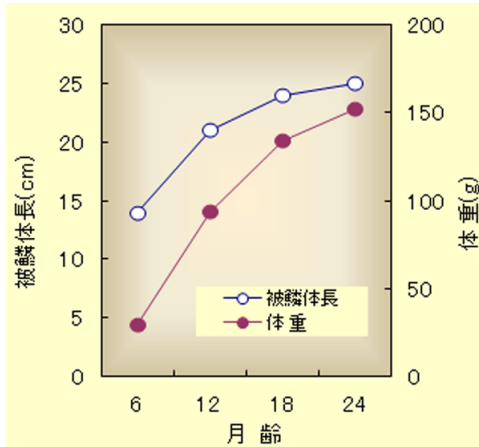
系群名 太平洋系群

担当水研 中央水産研究所



生物学的特性

寿命: 2歳前後
成熟開始年齢: 9カ月(一部)、12カ月(100%)
産卵期・産卵場: 10～7月で、盛期は2～7月と11～12月の年が多い、沿岸域
索餌期・索餌場: 周年、沿岸域
食性: 動物プランクトン等
捕食者: 中大型浮魚等

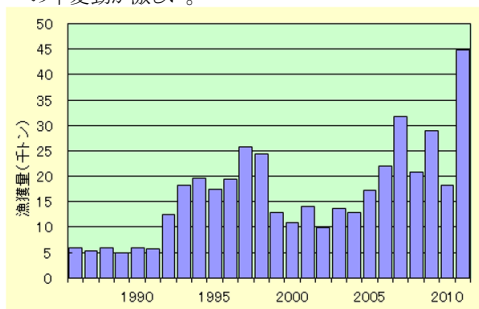


漁業の特徴

主に旋網、定置網により漁獲される。和歌山県では棒受網でも、また、高知県では多釣りでも漁獲する。シラス(稚魚)期は船曳網で漁獲される。外国船による漁獲はない。

漁獲の動向

漁獲量は1991年までは5,000～6,000トンであったが、1992年から増加し始めて、1997・1998年には2.5万トン前後となった。1999～2004年では1万～1.4万トンに減少したが、その後増加した。2007年3.2万トン、2008年2.1万トン、2009年2.9万トン、2010年1.8万トン、2011年4.5万トンであり、2012年は3.2万トン程度と予想された。近年は漁獲量の年変動が激しい。

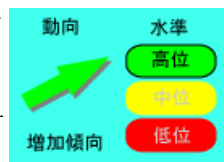


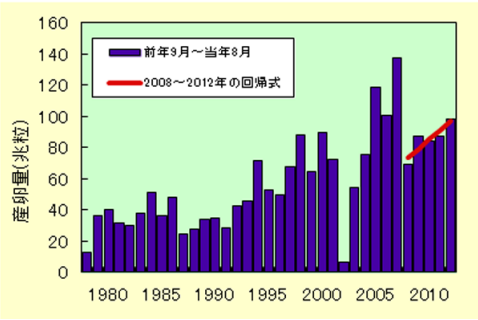
資源評価法

産卵量を資源指標値として、その推移により資源の水準と動向を判断した。産卵量として、各県水産試験研究機関と水産研究所による改良型ノルバックネットの鉛直曳採集結果に基づき、中央水産研究所がとりまとめた月毎の産卵量データを用いた。ウルメイワシの産卵期は10月頃始まり翌年の7月頃まで続くことから、産卵量として前年9月～当年8月を集計した。

資源状態

2004年産卵期から2007年産卵期まで産卵量の増加傾向が続き、2007年産卵期にはピークの138兆粒となった。2008年産卵期には69兆粒に減少したが、2009年産卵期にはやや増加して87兆粒、2010年産卵期には84兆粒、2011年産卵期には87兆粒となった。2012年産卵期では9～6月の産卵量96兆粒であり、産卵量の9～6月と7～8月の関係から、年間産卵量は98兆粒であると見込まれた。過去5年間(2008～2012年産卵期)の産卵量の回帰直線は $y=5.849x+67.67$ となり(x は年数、 y は産卵量(兆粒))、この回帰式の傾きは有意であった。このように、近年の産卵量は増加している。





管理方策

水準・動向が高位・増加にある本資源の管理目標として、資源の有効利用を図るべきであると考えた。ABC算定規則が改正されたことから、基準となる漁獲量に δ_1 と γ_1 を乗じたものをABClimitとした。近年の漁獲量は年変動が激しいことから、基準となる漁獲量として直近4年間の平均漁獲量(2.8万トン)を用いた。 δ_1 は資源水準が高位の時の標準値1.0とした。 γ_1 は $1+k(b/l)$ から求められる。kは係数、bは産卵量の最近3年間の回帰式から求めた傾き、lは産卵量の3年間の平均値であり、 $k=1$ 、 $b=7.134$ 、 $l=90$ (兆粒) から γ_1 を1.08とした。ABCtargetはABClimit × 安全率0.8とした。

	2013年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	30千トン	$1.0Cave4\text{-yr} \cdot 1.08$	-	-
ABCtarget	24千トン	$0.8 \cdot 1.0Cave4\text{-yr} \cdot 1.08$	-	-

資源評価のまとめ

- 資源量の水準・動向は産卵量で判断した
- 2012年産卵期の産卵量は、1978年産卵期以降では高位水準となった
- 2008～2012年産卵期の産卵量は増加傾向にある

管理方策のまとめ

- 水準・動向が高位・増加にある本資源の管理目標としては、資源の有効利用を図るべきであると考えた
- 近年(2008～2011年)の平均的な漁獲量に、資源量の指標値である産卵量の推移から求めた係数1.08と資源水準が高位の時の係数1.0をかけた値を生物学的許容漁獲量の上限とした

執筆者: 阪地英男・梨田一也

資源評価は毎年更新されます。